

雪の華

ウメ、

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

彼女を変えようとした獅子原爽。

その想いに答えようとした真屋由暉子。

二人の関係は互いへの想いを正しく理解しないまま進んでいく。
なかなか煮え切らない二人の関係。

そこに思わぬ話が舞い込む。

それは二人の状況を否応なしに変えていく。

*週一更新目標

*地の文多めです

*8話くらいで完結予定です

*一話を短くすることにしたので、少し延びるかも

目

次

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

第八話

78 69 55 41 31 21 14 1

第一話

先輩は初めて会った時から私を変えようとしてくれた。改造計画なんてうそぶいて一緒にアイドルを目指した。

でも私が本当にしたかつたことは

「先輩の役に立ちたい」

ただそれだけだった。

* * * * *

「最高に目立つてたよな」

「だな、衣装気合い入れたかいがあつたな」

「あんなに勝てるとは思いませんでした」

秋の国民麻雀大会、通称コクマで私、真屋由暉子は自分でも驚きの快進撃を演じました。桜杏先輩の作ってくれた衣装も話題になり、私の知名度は徐々に上がってきているらしいです。

ただあまり実感は無くて

「先輩たちが喜んでいるならよかつたかな」

なんて樂観的に考えていた時でした。

「みんな大変よ」

「だ、大ニュースです！」

「おっ！なんだ、なんだ？」

誓子先輩と成香先輩が息を切らしながら教室に駆け込んできます。

こんなに急いでいても扉をきちんと閉める成香先輩素敵です。

「ユキにオファーが来たの」

「オファーって、もしかしてテレビか!?」

「残念ながらテレビでは無いんですが」

「なーんだ」

「Weekly麻雀todayがユキの特集組みたいって」

「えつ・・・

とても現実だとは思えません。インハイの時に有珠山高校として載ったことはあるものの、個人の特集だなんて私に務まるのでしょうか？

一人で不安になつて いた私を爽先輩の声が現実に引き戻します。

「よっしゃ!!」

「!!」ビクッ

「はやりんがグラビアやつてた雑誌だよな?」

「えつ、そうだけど」

「これは早くもはやりんに並んでしまったか」 ドヤ

「そんなわけありません」

「そもそもなんで爽がドヤ顔なのよ」

私よりは爽先輩の方がドヤ顔が似合いますね。

「私のプロデュース能力って実は凄いんじゃないかな」

「いやいや、私の衣装が評価されたってことも」

「何言つてると、ユキのおかげに決まってるでしょ」

「ユキちゃん、素敵です」

私としては爽先輩と搖杏先輩の言うことも一理あると思います。インハイやコク

マでの活躍も先輩たちの言うことをちゃんと聞いたおかげでしたし。

「ユキはどう思う? この話もちろん受けるよな!?」

「はい、先輩がそういうなら。ただ・・・」

「ただ?」

断る理由はありません、先輩たちもきっと喜んでくれます。でも、

「水着で写真を撮られるのはさすがに恥ずかしいです」

「あーグラビアかー」

「確かにチャンピオンとか学生の特集は大体制服で写つてたはずよ」

「なるほど、それなら大丈夫そうです」

「ユキなら水着でもはやりんに負けてないと思うけどな、おもちとか」ボソッ

「私は桜杏ちゃんの作ったお洋服がいいと思います」オモチ??

「おっ、成香ナイスアイディア！それ採用！」

「そうと決まれば、さつそくデザインを考えて・・・」

「勝手に決めてしまつていいんですか？」

先輩達があーでもないこーでもないと特集の内容を話し合っています。特集の内容は出版社の方が決めると思うんですが・・・
「せつかくだから対談したいよな、対談！」

「誰とするんですか？」

「ええと・・・はやりん？」

「来ててくれるわけないでしょ」

対談そのものを否定しない当たり誓子先輩も興奮しているみたいですね。

先輩たちが私のことで盛り上がりがつてあると、有珠山高校に入つてよかつたと思えます。

「今のうちにインタビューとか写真撮影の練習しとかないか?」
「はい、やりたいです」

「ユキ乗り気だな。よしじやあ成香インタビュアー役な」
「ええつ? 爽さんがやるんじやないんですか?」

「私はほらカンペ出すから」

「その役は必要なの?」

以前にも少し受けたことがありましたけど、本格的なものは初めてです。でも私よ

り成香先輩が緊張してるみたいで、

「そ、それでは麻雀を始めちやつ!?」

「盛大に囁んだな」

「イタイデス! ウウ

「成香大丈夫!?

「チカちゃん・・・」

「ほら成香おいで」 ヨシヨシ

完全に二人の世界に入つてますね。

「しゃあない私がやるか」

「それじゃあ麻雀を始めたきっかけは何ですか？」

「先輩たちに誘われましたので」

「インハイで着ていた衣装はどうしたんですか？」

「先輩に作つてもらいました」

「目標は何ですか？」

「先輩の役に立ちたいです」

「・・・・・」

　　搖杏先輩が黙つてしましましたけど何かまずかつたでしょか？

「ユキの特集でこれはどうなんだ？」

「全部本当のことではあるんだろうけど・・・」

「ちょっと遊ぶだけのつもりだつたんだけど、やつてみてよかつたな」

「これは後で復習ね」

　　よくわかりませんが復習するなら頑張らないとですね。

「じゃあ次は写真撮影だな」

「ぼーじんぐつてやつですね」

「ポージング、かつこいい！」

「まずはチャンピオンがやつてた牌持つポーズやつてみよう」「こうですか？」

牌を指で挟んでポーズを決めます、これ意外と難しいですね。
爽先輩が撮ってくれますが、

「笑顔がぎこちないわね」

「いざ写真を撮られるとなると緊張します」「よし成香変顔してみて」

「えー!?」

「ほらほら」ハヤク

「チカちやんまで・・・・・ニパア」ヘンガオ

なんとも表現しづらい顔ですね、強いて言うなら・・・あざとい?

「・・・」カシャツ

「何で私を撮るんですか!?」

「私にも送つてくれない?」

「ふふふ」

「・・・」カシャツ

「ユキ今によかつたぞ」

そう言つて見せてくれた画像の私は自然に笑っています。

先輩たちを見ているとついつい表情が緩んでしまいますね。

「もつと動きながら撮る練習もしてみよう」

「じゃあ外行きますか?」

そのまま校庭にてて練習続行です。撮るたびに「かわいい、素敵」なんて言つてくれるで、私もだんだん気分が乗ってきます。

「いいぞユキ。ほら今度はこっちから」

「はい!!」

3人が少し離れて見守るなか、2人で夢中になつて続けます。まるで世界に2人だけしかいないように。

「爽もユキもノリノリね」

「ユキちゃんかわいいですから、今は制服ですがどちらと衣装着たらホントにアイドルと変わらないです」

「気合い入れて衣装作らないとな・・・あれ、雪?」

「そういえば少し降るつて言つてたわね」

「二人とも中に戻るー?」

「このくらいなら大丈夫だろ、むしろ少し降つてた方が絵になる」

「ユキいいぞ！その調子だ」

「はい！！」

ふらふらと雪が舞い降りては消えていきます。

爽先輩も言つてますし、私もまだ練習してみたいです。なにより爽先輩が楽しそうにしている時間を終わらせたくありません。

「前から思つてたんですけど、ユキちゃんつて雪が似合うと思いませんか？」

「それはユキと雪をかけて・・・」

「違いますよ！」

「私も似合うと思うわよ。ユキはどことなく儂いところがあるというか、最近はそうでもないかも知れないけど」

「でも今はすぐ素敵です」

「うーむ、今度の服は雪をイメージしてみるかなあ」

時には笑顔の時には寂しそうな顔のあらゆる私を撮つてもらいます。

爽先輩の声が止んでからも私は動き続け、爽先輩は撮り続けています。

雪踏みしめる音とシャツタ一音だけが響くなかで、アイドルになつたつもりで爽先輩に届けとたくさんの気持ちをこめる。

「・・・・・

「綺麗・・・ですね」

「踊ってるみたいだな」

「・・・そうね・・・それにしても爽はすっかり夢中よね」

「それは撮影に、それとも・・・・ユキに?」

「そんなの決まってるじゃないですか」

「やつぱり?でも本人はあんまり自覚してないんだよな」

遠くで先輩たちが何か話していますが、雪のせいかよく聞こえません。知らないふりをしてもう少し続けましょう。

そんなことを考えているとふとシャツター音が止んでることに気づきました。

「・・・・・

「爽先輩どうかしましたか?」

「・・・あ、ああ」

先輩のスマフォの画面は一枚の写真を映していました。

「この写真すごく綺麗だと思って、つい見惚れてた。こういうの奇跡の一枚っていうのかもな」

「どうでしょう?自分ではよくわかりません」

なんてはぐらかしながら、私はつい緩んでしまう頬を引き締めます。私を見て
ていることが嬉しくて。それだけで幸せでした。

「これ待受にしようかな？」

「私ですか？」

「ああ。だつて自慢できるだろ？『私のアイドルだぞ、いいだろー』って」

「止めてください、恥ずかしいです」／＼＼＼

「よし、採用！」

そんなことを言われたら、本気で止められるわけがありません。恥ずかしいですけ
ど、その何倍も嬉しさが込み上げます。

でも少し不思議だつたのは「奇跡の一枚」と見せてくれた写真が、私には本当に違
いがわかりませんでした。表情もとびきりの笑顔という訳でもなく、何と言つていいか
微妙な表情をしていました。

とてもとても幸せな時間でした。

「私たちもう卒業なのにどうするのかしら？」

今まで耳に届かなかつた声が鮮明に色を帶びます。

私が無意識に考えないようにしていた、必ず訪れる未来の話です。

私の前から2人がいなくなつてしまい、そして次の年にはもう2人。 そうなれば私はまた1人きり。

中学の頃なら気にもしなかつたことですが、今は1人に戻るのが酷く恐いです。私は耐えることができるんでしょうか？

考えるほどに沈んでいく私に近くから声がかかります。

「ユキ？ 何暗い顔してるんだ？ 私の撮影技術が不満なのか！？」

「いえ、そうではなくて」

「大丈夫、本番ではプロのカメラマンがちゃんと撮つてくれるつて」

「・・・・・」

「まだ不安か？・・・本番は1人でも私たちが後ろから支えてるから！ そう思えば不安も吹き飛ぶぞ」

「・・・はい！」

先の無い行き止まりの世界が一気に拓けたようでした。
先輩からすれば後輩を気遣う何気ない一言でしょ。

でもその時の私には

「来年、再来年と別れが来ようともいつでも支えてる」

そう言われているようで。

爽先輩は本当に心が読めるんじやないかと思うことが時々あります。

まつたくの偶然かもしだせませんが

「1人でも後ろから支えてる」

この言葉だけでその時の私の不安を吹き飛ばすには十分でした。

第二話

* * * * *

それからは毎日が充実していました。

爽先輩指導の下、取材に向けて練習をしていく日々。インタビューもきちんと答えられるようになりました。

実際の取材では見事搖杏先輩の作つた衣装が採用され、カメラマンの方からは大好評でした。

私の特集記事が載つたWeekly麻雀todayが発売されるととても大きな反響があり、学校と出版社に私へのファンレターまで届きました。

「まさかファンレターまで来るようになるとは」
「本物のアイドルみたいです！」

「ユキはもう読んだのか？」

「全部では無いですが。『好きです』みたいな内容が多かつたですね」

「今度はサイン練習でもするか？」
「サイン!? カッコいいです！」

少しずつアイドルに近づいていることに実感が沸いてきます。

私はもつと成果を出そうと躍起になり、その後も先輩たちとサインやダンスなどの練習を続けました。

爽先輩との最後の3ヶ月はそうして過ぎていきました。

しかし本来なら楽しいはずの時間でも私は心は霧がかかったように、彷徨い続けています。

理由ははつきりしています。爽先輩が進路を教えてくれないです。

麻雀部の中でも気を使つてなのか、進路の話は誰もしません。

疎外感や孤独感が私を苛みます。直ぐそばにいた先輩たちが遠く離れてしまつたような、そんな心境です。

卒業式が間近に迫つてもそれは変わりません。いつもと同じように普通に過ごします。

先輩たちのその様子は

「別れることが当然で誰も気にしていない」

私の目にはそんなふうに写ります。

私にとつて有珠山高校麻雀部は、この5人は特別です。
それをありふれたものだと言われているようで。
ついに私は我慢ができなくなりました。

ダンツ

「何故ですか!?」

突然の大きな音に注目が集まつたところで、感情の勢いに任せて捲し立てます。

「みなさんは気にならないんですか!?」

「どうしたのユキ？落ち着いて」

「この麻雀部は、5人での活動は終わつてしまふんですよ？なのにどうして普通にして
いられるんですか!?」

「なにもずっと会えなくなるわけでもないし」

「爽先輩はどこに行つてしまふかもわからぬいんですよ!!」

「会いたいと思った時に会えれば大丈夫です」

私との温度差に愕然としますが、改めて考えてみたら当然のことでした。

この1年だけの付き合いの私と、それぞれ長い付き合いのある先輩たちでは考え方
が違うのは当たり前です。

先輩たちには一度別れても必ず再会できる、それだけの積み重ねがあるのだと思わさ
れます。

「爽先輩はどこに行くかも分からぬのに・・・会いたい時になんて会えません!!」

「そつ、そんなことないんじやない?」

「あります!一度別れてしまつたら二度目は無いかもしねない!」

「爽がユキをほつたらかしにすると思うか?」

「それじゃあ毎日会いに来てれますか、爽先輩?」

「ここまで一人黙っている爽先輩に直接問いかけます。

「・・・・・・・・」

「なぜ黙っているんですか?」

「・・・・・・・・」

「私には話言葉もありませんか?」

「・・・ユキに行く大学言つてなかつたつけ?」

「へつ・・・・?」

前に何度もぐらかされてから、直接は聞いていませんでした。部活中も皆が避け

て い ま し た し、 触 れ て は い け な い の だ と 思 つ て い ま し た。
も し か し て ・・

「 私 は 誓 子 と 同 時 近 く の 大 学 に 行 く ゾ。 会 お う と 思 え ば 每 日 で も 通 え る 距 離 だ な 」

先 輩 は ア ハ ハ と わ ザ と ら し く 笑 つ て い ま す が、 私 の 中 で 欽 喜、 驚 愕、 疑 惑 な ど い ろ い ろ な 感 情 が 入 り 亂 れ ま す。

「 ・・ 本 当 な ん で す か ? 」

「 も ち つ ! 」

「 ゆ、 ユ キ ち ゃ ん 勘 違 い し て た ん で す か ー ? 」

「 さ つ き の ユ キ は な か な か 迫 力 あ つ た な 」

「 も う ど う な る か と 思 つ た わ よ 」

部 室 が 安 心 感 で 包 ま れ て い き ま す。

私 の 中 か ら 喜 び が 溢 れ だ し 他 の モ ノ を 押 し 流 し て い き ま し す。

自 然 と 零 れ 落 ち る 涙 を 止 め る 術 が わ か り ま せ ん。

「 ユ キ ち ゃ ん 泣 い て る ん で す か ? 」 つ ハン カチ

「 ど う し た ユ キ ? 私 が 遠 く 行 か な い こ と が そ ん な に 嬉 し い か 」

「 あ ま り に も 呆 气 な い 事 実 で 呆 れ た ん で よ 」

「 爽 は 遠 く に い て も 近 く に い て も あ ん ま り 変 わ ら な い も ん な 」

「それはどういう意味かな?」ムム

先輩たちの言葉が少し怪しかったことも、もうどうでもよくなつていました。それよりもこれからも一緒に過ごして行けるのだという事実だけで私はいっぱいです。

「爽先輩は卑怯です」ヒクツ

「ユキまで!私に味方はいないのか?」

「今回は爽が悪いわね、ちゃんとユキに伝えないから」

「そうです。私に謝ってください」アハハ

「だー!もう。申し訳ありませんでしたー!」

部室はいつも通り笑顔に包れます。

先輩たちはいつも通りで、なにも変わりません。

私が勝手に思い違いをしていただけです。いつでも私の大好きな先輩たちです。

* * * * *

卒業式の日まで、いえ卒業式が終わつても変わることのないまま、爽先輩と誓子先輩は卒業していきました。

有珠山高校麻雀部はこれからも変わらず活動を続けていきます。

* * * * *

結局あの出来事はただの勘違いでした。
でもあの時は気づいたんです。

獅子原爽という人間が私の大事な部分をどれだけ占めているのか。
私が気づかぬうちにそれはとても大きく広がっていました。

第三話

ユキに進路を黙っていたのは、ちょっとしたドツキリ・サプライズのつもりだった。少しのビックリと呆れるユキ、それだけで簡単に終わるはずだつた。

でもユキは真剣に悩んでいた。

私たちが声をかけずらいくらいに。

最後には私が伝え忘れていたことに無理矢理した。

真剣に怒り、焦っているユキに「ドツキリでした」なんてとても言えなかつた。でもそんなユキを見て私は嬉しく思つた。

私の事で悩むユキがいつも以上に愛おしく思えた。

「終わった―――!!」
「これで手続きも一段落ね」
ふう、と息を吐くチカ。

私とチカが進学してから一月がたとうとしていた。

その間、いろいろな手続きに忙殺され後輩たちとはほとんど会えていない。
しかしそれもこれで終わり。

もうすぐ楽しい楽しいゴールデンウイークだ。

「ようやくスッキリだ」

「麻雀部・・・本当に良かつたの？」

何度も繰り返された質問だ。

チカも飽きないな。

「もういいんだって、麻雀は高校で終わり！」

私は大学の麻雀部・麻雀サークル、地域の麻雀クラブなどの誘いを全て断つていた。
チカはそれを良く思つてないらしい。

「それにカムイの力を使わない私なんてただの美少女だからな」

「・・・はあ、ハイハイ」

呆れられてしまつた。せめて突つ込んでからにして欲しかつたな、周りの視線が痛い
気がする。

「まあ他にやりたいこともあるしな」

そう言つて落とした視線の先にはサークル申請書の文字。

「爽らしいとは思つたけど、まさか許可が出るとは思わなかつたわ」

北海道のお悩み解決隊（仮）

麻雀を止めて何をするか考えた結論がこれだ。

カムイの力を麻雀ではなく、人のために使おうと思う。

「なんと言うか昔から変わらないわよね、爽は」

「やつぱり子どもっぽいかな？」

よく言われるので気にしてないが一応聞いてみる。

「むしろ大人すぎるくらい大人だと思うわよ・・・成香と比べて」

「それは大人なのか子どもなのか!?」

成香には負けていない・・・はず。

「そういえば有珠山高校は新入部員入つたのかしら」

「ユキ目当ての人で見学は凄かつたらしいぞ」

Weekly麻雀todayでさらに人気のでたユキは「北海道のはやりん」とか「高校生版はやりん」なんて呼ばれたも正在するらしい。

はやりんが最近不調なのはユキの活躍に戦々恐々としているからだとはもっぱらの噂だ。

「良いことじゃない?」

「うーん、どうだろ?」

「そつか! ユキが誰かにとられないか心配なの?」

「まあ少しはな」

「あれ? 随分正直なのね」

あのサプライズの失敗でお互いに心境の変化があつたのだと思う。

あれから私とユキは二人でいる時間がとても増えた、以前よりお互いのことによく知ろうと努めた。

そんな私たちには周りからはイチャイチャしているように写っていた見たいで。

「付き合いたてのカップルだもんね、当たり前か」

私たちはいつの間にかそういう扱いになっていた。

もちろん私とユキの間にそういう事実はない。キスは当然、愛をささやいたことすらない。

しかし噂は広まり、一部では公然の秘密のように扱われているらしい。

チカ・桜杏・成香は事実を知っているが、三人とも楽しんでからかつてくるしまつ。噂が広まつたのはだいたいこいつらのせいだ。

「大学でも噂してたのか?」

「別にいいじやない、噂が流れればユキに手を出す人もいなくなるわよ」

「そうだよな・・・」

そう言わると強く反論できない。

その案はひどく魅力的に響く。

結果あまり否定しなくなる、これも高校で噂の広まつた一因だろうな。
でも

「早くなるようになつちやえればいいのに」

「簡単に言われてもなー」

「一言『付き合って下さい』で済む話じゃない」

「ユキがどう思つてるかわからないだろ」

「・・・・・はあ」

また呆れられてしまつた。

ユキが私を好いてくれてているのはわかる。

ただそれがlikeなのかloveなのかわからないだけだ。

私は人から向けられる好意に疎いのかも知れないな。

「ユキが断ると思うの?」

「思わないけど、ユキなら恩返しのためだけに『はい』つて答えそうだし」

そんな答えは望んでいない。

私も、きっとユキも。

欲しいのは本心からの答えだけだ。

* * * * *

「ゴールデンウイークが遠い!!」

「もう今週末じゃない?」

「だつて~」

最近は遠足の前の小学生よろしく楽しみで仕方がないのだ。

何しろ5人全員が集まるのは大学入学以来始めてだ。

「ところで集まつてどこ行くかは決まったの? 私まだ聞いてないんだけど

「あれ言ってなかつたつけ? ··· のど自慢出るぞ、みんなで

「···あのNOKでやつてる?」

「うん」

「···本当に?」

「うん」

「·········」

「うん?」

「・・・いつも・・・言うのが遅いのよ!!もう今週末じゃない、なんの準備もしていないわよ!」

「大丈夫! 書類審査はパス済みだ」グツ

「グツじやないわよ! 曲は? 衣装は? 場所は?」

予想以上の反応だな。うん。

「一旦落ち着けって」

「爽が落ち着き過ぎなのよ!」ガタツ

「ザワザワ

立ち上がりつていたチカがゆっくり座る。

「・・・」

「コホン。 摆杏たちは知ってるの?」

「揆杏だけな」

「まあ部長だものね」

「あとユキに歌を練習しておくようについてだけ言ってあるな」

「なるほどね、まったく懲りないわね」

自分でも思う。

ただ今回は失敗しても誰も悲しまないサプライズを選んだつもりだ。

「ユキに呆れられるわよ」

「ユキと成香はきっと今頃、何をさせられるか考えて、悶々としてるぞ」
ユキの悶々とする姿を想像する。
なかなかいいんじやないか。

「ま、まつたく。 . . . 何よ?」

「いんや」ニヤニヤ

チカだつて成香を想像したはず。

「で曲と衣装と場所は?」

「曲ははやりんの『時にはHAYARIに流されて』、衣装は前に搖杏が作つたやつでユ
キは取材の時のだな。場所は大学の近くの市民ホール」
「用意は完璧なのね」

「あとは前日のオーディションに合格するだけだ!」

「なるほどね。私たちも頑張つて練習しないとね」

「あ、練習は禁止な!」

「え——!」

スマフォのユキの写真を見る。私の撮った「奇跡の一枚」だ。
最近この写真をよく見るようになつた気がする。

今回の「のど自慢大会」の動機は単純。

世間に見せつけたいのだ。ステージで歌つて踊る私のアイドルを。
そして幼稚な嫉妬心と独占欲。

人気ものになつたユキを私の物だと宣言したい。

噂は本当なのだと知らしめる、その為だけのステージだ。

自分でもくだらない理由だと苦笑する。

それでも写真が私を唆す。

『私を手に入れてみて』と。

この時の私はそんなことしか考えて無かつた。
ユキのことを一番見えていなかつたのは私だつたのかかもしれない。

第四話

私と爽先輩は付き合っているらしい。

自分のことなのに変だけど、どうもそちらしい。

私は爽先輩のことが好きだ。

先輩は私にとつて唯一無二のかけがえのない存在だ。
でも私はどうだろう？

私は先輩にとつて特別？

先輩は誰にだつて優しく頼もしい。

それが私を不安にする。

でも・・・アイドルとしての私は先輩にだつて特別なはず。
だから私は・・・

* * * * *

「おはようございます、爽先輩」

「おおつユキ！待つてたぞ」

会うのは確か一週間ぶり。毎日会つて話していた頃が懐かしく恋しいですね。

「久しぶりーー!!」

そう言いながら飛び付いてきます。卒業してからの先輩は二人だけの時にこうす

「ユキーーー！」

「」

「会いたかつたぞー」

「うつ・・・こ

「こ?・」

「こ、殺す気ですかっ!?」

息を切らしながらの抗議で漸く先輩の腕の中から脱出です。

名残惜しいとかはこの際考えません。

「悪い悪い。久々に会うからなー。それにユキが可愛いのがいけないとと思うぞ」

「そんなこと言つたつて許しませんよ」

「時と場所は選んでるし、たまにはいいじやんか?」

「力が強すぎるんです！」

なお抗議しながらも、頭には別の事が過ります。

(こんなに強いのは初めて……何か嫌なことでもあつたんでしょうか? でもたまにならいいかもしませんね)

「ユキだつて満更じや無さそうじゃんか」

「知りません。そんなことより」

「そんなことつ!」

ショックを受けてる先輩は無視して進めます。
「今日はどうするんですか?」

今はゴールデンウイーク真っ只中。今日は元有珠山高校雀部の五人で出かけると
聞いてます。詳しくはまたサプライズらしいです。

「よしじやあそろそろ行くか」

「他の先輩方は待たなくていいんですか?」

「向こうは衣装持つて現地集合の予定」

ということはしばらく二人きりですか。

・・・寝癖は直したはずですし、服も変なところはないですよね。

「どうした? いきなりキヨロキヨロしだして」

「い、いえ」

さつきまでは先輩の勢いで忘れてましたが、改まると例の噂のせいで意識してしまい

ますね。

爽先輩もそなんでしようか？

「どうか衣装ですか？」

「そう。w e e k l y 麻雀 t o d a y の時のやつ、あれ可愛かつたからな」

「確かにあれは・・・つて、そうじやなくて今日何するつもりですか？」

また変なことを、と爽先輩に視線を送る。

「チツチツ」

今回は違うぜ、と得意気に舌を鳴らす先輩。

無駄に勢いをつけると

「今日はのど自慢に出場する!!」

高らかに宣言する。

どうだ驚いただろ、とドヤ顔決めてますが。

「・・・ そうですか」

「薄っ!? それだけか? もつと『えーーー!』とか『じえじえじえ』とかないのか?」

古いです。それに

「だいたい予想してましたから。歌の練習をしつかりさせられて、ゴールデンウイーク中のイベントとくればだいたい予想つきます」

「ぐぬう、練習させたのは失敗だつたか」

「それじや本末転倒なのでは？」

本当に悔しそうですね。

そんなに驚かせたかったんでしょうか？

「他の先輩は歌の練習知らないので、びっくりするんじやないですか？」

「ユキじやなきや意味ないんだよ」

その台詞はドキッとします。不意討ちは止めて欲しいですが
「驚いた顔写真にとつて団扇にして、本番で振るうと思つたのに」

「何しようとしてるんですか！」

さつきのドキドキを返して欲しいです。

それに、

「そんな顔他の人には見せたくないです」

込めた想いに気付いてくれたのか、顔を赤くする先輩。

先輩には赤がよく似合いますね。

「・・・」

心地よい沈黙です。

今なら手を繋いでも、繋ぎ返してくれるでしようか？

ちょうど手を伸ばそうとした時、先輩から沈黙が破られます。

「普、プロデュースするならアイドルの全てを知つとかないといけないもんな」

「全てつて何が知りたいんですか？」 チラツ

一瞬目が合いましたが、逸らされます。

「全ては・・・全てだ」

「はあ、意味がわかりません」

「こんな質問答えられるかー！何答えたつてセクハラにされそuddash;！」

「よくわかりましたね」

「」

爽先輩が勢いで誤魔化してますが顔は赤いままですね。

答えてくれなかつたのはちよつとショックです。

それとも本当に全てが知りたかつた、なんて流石にそれはないですよね？

「そ、それより今日の話だ！ダンスも覚えてるな？」

話題を変えるのも無理矢理すぎません？

「はい。でもオーディションつて受かるんでしようか？」

受かる前提で考えてましたけど、本来かなり狭き門のはずです。

「今日は厳しいと思って事前リサーチして、作戦も考えてある」

「やけに自信満々ですね」

「客観的に見て、受かる確率はかなり高いはず」

イマイチ納得できず、首をかしげる私を見て先輩が得意気に続けます。

「まず知名度がある。去年のインハイ出場選手でユキは雑誌にも出た。」

「確かに」

「次は本気度。ユキのダンスと歌は本気で練習しているのが伝わるし、播杏の衣装は本物のアイドルレベルだ」

「そうですね」

「そしてこれが決めてだが、今回はいつもより応募が少ないらしい」

「・・・たまたまじゃないですか!?」

「たまたまでも出られればいいだろ?」

こう理由を並べられると最後は別にしても、受かる気はしてきますね。

それにしても

「先輩たちもダンスと歌練習してたんですね。気づきませんでした」

「ん? してないぞ」

聞き間違えたみたいです。

「練習してたんですね?」

「だから、しないぞ」

「・・・なぜっ!?

「おおう・・・私たちが下手な方がユキが目立つかと」ビクツ

私個人よりも五人を見て欲しいですが。

それでオーディション受かるんでしょうか?

「今日集まつたら最低限の練習はするさ。だから今回は自分のステージだと思つて、思い切りやつてくれ」

「・・・先輩はいつもそうです。自分より私のことばかり」

「ユキにはそうしたくなる魅力があるんだよ」

「先輩にだつて・・・」

魅力がある。そう言おうとしましたが先に先輩の声が重なります。

「なら一つお願ひ聞いてくれないか?」

「お願いですか?」

「ああ。本番は私だけに向けてのステージしてくれ」

「先輩だけの?」

「歌とかダンスって誰かに向けてやるだろ？本来はお客様みんなに向けてやるのかな。それを私だけに向けて欲しい」

「はい!!」

今の私では歌やダンスでそれを表現することは難しいと思う。だから出来る限りの気持ちを込めよう。それができれば言葉なんて後から着いてくるから。

「二人だけの密約だ」

「秘密の約束です」

しつかりと小指を絡める。離そうとしない、離したくない。

そのまま歩き続ける。

「二人だけの密約なんてカッコいいです

「他にもするか？」

「何がいいでしようか？」

いつの間にかどちらからとなく結ばれた手は会場に着くまで離れることはありませ
んでした。

結果から言うと、事前オーディションは無事通過することができました。

今日のことを何も知らなかつた成香先輩が緊張のし過ぎで体調を崩したり、手を繋いでるところを見られてからかわれたりアクシデントはありましたが何とかのりきりました。

明日は本番。たくさんのお客さんの前でのステージです。テレビのカメラまで入ります。

でも今の私にはそんなことはどうでもよくて。

先輩に向けてのパフォーマンス。

どうすれば先輩に伝わるか、それだけで頭がいっぱいでした。

第五話

「出場者の方はこちらにお願いします！」

係の人から声がかかる。

これから入場の仕方など軽くりハーサルをしたら、すぐに本番が始まる。事前のくじ引きの結果、私たちの出番はオーラス。目立つには申し分ない。いよいよ私のユキを、私とユキを世界に披露する時だ。

* * * * *

「よつしや、準備はいいか？」

「はい」

「おう」

「任せて」

三人からそれぞれに気合いの入った声が上がる。

ユキは今までの練習の成果を発揮しようと意気込むし、チカは出場を知った日から密

かに練習を重ねていたらしい。

播杏は新部長になり時間の無い中、五人それぞれに髪飾りを作ってくれた。

成香だつてきつと・・・

「待つてください。もう一度おトイレ行つてもいいでしようか?」

「またか?もう時間ないぞ?」

「だつて緊張でー」

一人だけ昨日のオーディションからずつと緊張してるらしい。
一目見れば誰の目にも明らかだ。

緊張でダンスの練習も上手くいかず、さらに緊張する悪循環。
インハイの先鋒戦の方がよっぽど大舞台だと思うけど。

本人曰く

「心の準備時間が足りな過ぎるんですよ!!」

のことだ。

成香には悪いが一人下手っぴなのがいてもいいと思う。
むしろいた方が面白いんじやないかと思う。
だからサプライズにしたんだし。

「大丈夫だつて成香」

「先輩？」

「良くても悪くてもネットで話題になるくらいだつて」

「学校では有名人になれるかもな」

「失敗したつて可愛いから大丈夫よ」

「どれも大丈夫じやないですよ!!」

「慰めにすらなつてないですね」

そう言つたユキは緊張なんてどこ吹く風だ。

白を基調としたアイドル風の衣装に雪の結晶を象つた髪飾り。

その佇まいはもう昔のユキではない。

どこか影があり暗かつた頃とは違う、強くしつかり前を向いている。

「ユキは少しリラックスな、気合い入りすぎだ。もう始まるけど、出番はまだ一時間以上先だぞ」

「ようやく本番だと思うとつい」

「こんなに前のめりなユキも珍しい。

「まずは他の参加者の歌も楽しむぞ。ほらさつき戦隊物みたいな全身タイツいたぞ?」

「ヒーローだつたら爽先輩は間違いなく赤ですね」

「ユキは白かピンクかな」

「播杏先輩と成香先輩は青か緑、黄色でしようか」

「チカは敵の女幹部だな」

「なんで!?」

チカは案外ノリノリでやりそ�うだけど。

ムチ持つて襲い来るチカ、力がつき逃げ惑う成香、そこに颯爽と現れる私達。結構楽しそうな気がしてきたぞ。

「私もヒーロー側に入れなさいよ！ 4 vs 1 なんて卑怯じやない！」

「まつてチカセン」

「何？」

「今いい衣装が閃きそう。・・・ちょっとエロいやつ」

「誰が着るかつ！」

「チカちゃんの女幹部・・・」

「成香は想像しないで！ お願い！」

チカの女幹部、成香でなくとも想像しちゃうな。

ちなみに私はすぐ逃げる。

「ひー」

気の抜けた声と一緒に成香がチカから距離をとる。

「な、何を想像したの？」

「日頃の行いの賜物だな」

「あんたたちより優しくしててるわよ！そのニヤニヤした顔止めなさいよ！ねえ成香。ほ
ら私は優しいわよ？」

何を想像したかは聞いてもいいのだろうか？

チカの精神衛生上、闇に葬つた方がいい氣もするな。

「チカ先輩は相変わらず成香先輩には弱いんですね」

「弱いとはまた違う気もするけどな。それよりリラックスはできたか？」

「はい。もう大丈夫です」

あとは出番に合わせて少しづつテンションを上げていこう。

そこにちようどよく声がかかる。

「それでは入場しますのでリハーサル通りにお願いします！！」

五人それぞれに反応する。

みな緊張したりワクワクしたりそれぞれ。

私も緊張と期待に体が震える。

一步踏み出そうとしたとき、後ろから手を取られる。

「ねえ爽、一ついい？」

「なんだこんな時に。チカもトイレ行きくなつたか？」

「そういうのじやなくて。・・・無茶はしないでね」

「無茶？しないって」

「・・・・・」

チカの疑うような目が印象的だつた。

* * * * *

「さあ今日の出場者の入場です」

放送が始まり、司会者の一声で入場が始まる。

一人一人入場するたびに歓声は大きくなる。

鳴りやまない歓声と万雷の拍手が耳に届く。自分が舞台に上がつたのだと自覚する。
瑠杏が誰にともなく咳く。

「すごい歓声だな」

「たまにはこういうのもいいな」

気分が高揚してくる。早く歌いたい、そんな想いまで湧いてくる。

チカや成香も同じようで、さつきまで緊張で真つ青だつた顔が今は紅潮している。

(これがアイドルの見て いる世界か)

ユキにアイドルについて教えたつもりだつたが、私は何も知らなかつたのだと思う。
ここに一人で立ち、この歓声を倍返しするような仕事。
とても私には勤まらないと思う。

ユキはどうだろう?とふとユキを見る。

「・・・・・」

目に入つたのは、手を振り笑顔で歓声に応えるユキ。

その笑顔は観客を癒し、一挙手に皆が注目する。

（・・・・・）

いつかの未来、観客席からステージのユキに向かつて手を振る自分を妄想する。
ユキが本物のみんなのアイドルになること。

漠然とあつた不安の正体、ユキへ踏ん切りが着かなかつた訳を悟る。
しかしもう手は打つた。

今日この舞台でユキは私だけのアイドルになる。

* * * * *

「続いての方どうぞー」

のど自慢も終盤にさしかかる。

この組が終わればついに私たちの出番だ。

さすがに私も緊張してくる。

みんなと同じように頭の中で歌詞や振付を反芻する。ユキだけがただじつと舞台を見つめていた。

カーン

鐘の音が鳴り、歌が遮られる。

司会者が一言声をかける。

つまり私たちの出番だ、緊張が一気に高まる。

「次は本日最後の組になります。どうぞー」

五人で飛び出す。

私たちのことを知つてか知らずか歎声が高まる。

そんな中センターに陣取るユキが静かに宣言する。

「20番。曲は『時にはHAYARIに流されて』」

イントロが流れ、ダンスを始める。

お客様からの期待を乗せた手拍子が聞こえてくる。

さつきまでの緊張が嘘みたいだ。

自然と顔が笑顔になり、体が動く。成香もぎこちないながらも一生懸命踊る。
そして

「」

ユキの歌声が会場に響き渡る。

一瞬歓声が鳴りやみ、ユキの歌に聞き惚れる。

鳥肌が立つ。

この歌が私に向けられている事実に興奮する。

「」

次のコーラスで歓声が一気に溢れかえる。

その歌声は歓声をかき分け一人一人にしつかり届いているようだ。

「」

その声が仕草が表情が皆を魅了する。

何かを訴えかけるその様に全員が惹かれ、込められた感情に感じ入る。

「
・
・
・」

躍りながら驚いていた。オーディションでも上手いとは思つたが、ここまでとは思わ
なかつた。

これなら優秀賞もいける！
そう確信したとき

「きやつ」

成香が転ぶ。

直ぐに助けに向かうか、成香なら大丈夫と躍り続けるか一瞬迷う。
その間にいち早く動いたのはユキだった。

〔〕

歌を途切れさせることなく、成香に手を差し出す。
成香はその手を取り、立ちあがり躍りに復帰する。
元から脚本通りだとすら思える自然な流れ。
さらに歓声が大きくなり、最高潮を向かえた。
そして・・・

カンカンカンカーン

最高評価を伝える鐘が鳴る。

万雷の拍手の中ユキの舞台が終わりを告げた。

「ここからは私の舞台だ。私の目的を果たそう。

「ユキ!!」

「爽先輩！」

大声でユキを呼び、全力で抱き締める。

ユキは合格の歓喜で抱き返してくれる。

「・・・」

それでも私はユキは私の物なのだと、観客にテレビの前の視聴者に見せつけるために。

これでもかと放すものかと抱き締め続ける。

ユキも困惑しだす。

「先輩?」

「・・・ユキ」

一瞬この後の事を考える。

迷いを振り払い覚悟を再確認する。

そしてその困った顔に唇を近づけていく。

逃げないのを確認しさらに近づけ

「爽!!」

チカが大声とともに私たちの間に割つて入る。

少し遅れて桜杏と成香も加わり五人の輪になり合格を喜ぶ。

止められるとは思つてもみなかつた。

輪の内側では私は焦り、ユキは困惑し、チカからは攻めるような視線を浴びていた。

「合格おめでとうございます。今のお気持ちは?」

司会者の声で輪がとけ、ユキがインタビューに答える。

「まるでアイドルみたいでかつこよかつたですよ」

「ありがとうございます。アイドルを目指しているので嬉しいです」

「あなたならきつとなれますよ。最後にお所とお名前をどうぞ」

「有珠山高校の真屋由揮子です」

一通り答えて席に下がる。

その後のプロの歌も最終結果発表も私は上の空で過ごした。

私は失敗した、それもしてはいけないことをしようとして。

私はユキの近くから離れるべきなのか。

今の関係は壊れてしまうのか。

そんなことばかりが頭に過り、良い可能性なんて考えられなかつた。

どうやら私たちは最優秀賞は逃したらしかつた。

のど自慢に出場し優秀賞を取つてから、私の周りは更に騒がしくなりました。高校でも声をかけられる数がたくさん増えました。

でもあの日以降一つの声が私の周りから聞こえなくなりました。

爽先輩は私を避けるようになりました。

会いに行つてもダメですし、チカ先輩に頼んでもダメでした。

あの時舞台上で爽先輩が何をしたかったのか、今なら分かります。でも今爽先輩が何故私を避けるのかが分かりません。

それでも私は爽先輩のために・・・

そんな悩みを抱えていた私に一本の連絡がきました。
タイミングに運命を感じるようでした。

ただ私一人で考へるには大きすぎて。

「播磨先輩、成瀬先輩少し相談があります」

第六話

私に届いた一本の電話。

始めて受けたのは大きな驚き。

そして喜びと達成感が徐々に沸き上がる。

芸能界へのスカウトです。

「ウチの事務所で本物のアイドルにならなかいか?」

そう言されました。

「考え方ください」

すこし考えたあと、私のこう答えました。

頭に浮かんだのは爽先輩のこと。

この誘いを受けるにしても、受けないにしても爽先輩なしで一人で決めることに強い違和感を覚えました。

だからまずは今の爽先輩との関係を変えなくては、そう決心しました。

だから

「播杏先輩、成香先輩相談があります」

私、獅子原爽は相も変わらず大学に通っている。

あまり真面目に出ていなかつた授業にも以前より出席率も上がり教授にも誉められた。

授業内容が頭に入つてゐるかは別の話だが。

今日も上の空のまま授業が終わる。

昼食にしようと教室を出たところでチカに呼び止められ、そのままラウンジに連れ添う。

「なんだかちゃんと話すのは久しぶりだな」

「爽が避けるからでしょ、まつたく。はあ……」

のど自慢大会以来気まずくて。特にユキとは一切連絡をとつていない。他のメンバーともあまり関わらないようにしてゐた。

チカにはあの時直接止められた事もあり、何かを話さなきやとは思う。でも何を話せばいいか分からぬ。

自分の中でもあの時のこととまだ消化できていない。

「話し難いのはわかるけど、爽は一人で考えすぎよ。『迷惑かけた』って謝るでも、『何で止めた』って怒るでもいいから話して欲しい」

「……」

「どんなことでもいいから。話してくれなきや何にも分かんないわよ」「……チカ」

「爽はいつも助ける側だからさ。たまには弱いところを見せてもいいじゃない?」「でも、」

「でもじゃないわよ。私たちにも助けさせなさいよ!」

突然の大きな声に他の学生が反応しづわつき始める。

そんな喧騒は私の耳には届いていない。ただただチカの言葉に聞き入っていた。思えば今まで無茶をしてもチカたちが助けてくれた。

自分から助けを求めるることは無くとも、いつでもそばにいてくれた。

「いきなりユキに話すのが難しいなら、私ならいつでもどこでも付き合うわよ。せつなく立ち上げたサークルも、爽がいなくて暇だしね」

落ち着いて私に言い含めるように語る。

それからは堰を切ったように感情が溢れだした。

「私は……。——！」

今までが嘘のように言葉が連なる。
チカはそれをただただ聞いていた。

優しい笑顔を浮かべながら、聞いていてくれた。

「はい、タオルと飲み物」

その後私達は目立ちすぎたラウンジから場所を変え、サークルで借りた部室？に来て
いた。

「サンキュー」

「しかし爽の涙なんて珍しいもの見たわ。ちょっと得した気分」

「別に先週だつて泣いたぞ」

「えっ!? やっぱりユキの

「わざび付けすぎて」

「……冷めるこというんじやないわよ！」

いくら幼なじみでも泣くのを見られるのは恥ずかしい。

それも号泣だつた。

冷静になると一気に恥ずかしさが込み上げて来て、よくわからない誤魔化し方をしてしまった。

まあ事実だしいつか。

「ねえ、爽。さつきの話を聞いてね一つ言いたいことがあるんだけど」「お、とう。何でも言つてくれ」

何でもとは言つたがしり込みしてしまう。

きつと怒られるんじやないかな?

でもチカの言葉は以外なものだつた。

「正直、ほとんど何言つてるかわからなかつた」

「……」

「全てがわからんねーつてやつ」

「……」

イラつとした。

手を出さなかつた私を誰かに誉めて欲しい。

ただ思い返して見ると、私は感情のままに思いをそのまま言葉にしていた。文の繋がりなんて考えず。聞き手に伝えることも考えず。

ひどいわがままをしたと思う。

本来なら当時の状況から説明するべきだつた。そうでなければ分からぬのも無理はない。

「でもね少しはわかつたこともあるの」

チカが間をおく。そして

「爽は本当にユキが好きなのね」

はつきりとそう言われた。

なら私もはつきり返そう。

「ああ。私はユキが大好きだ」

素直に言葉に出す。

自分で思つたよりも、何の抵抗もなく言えた。
きつとチカに全部吐き出した事が良かつたんだろう。
またチカに借りができちゃつたな。

「ならささつさと仲直りしちゃいなさいよ」

「よし、電話かけるぞ……」

プルルル

緊張感が一気に高まる。そして、
ガチャ

「ユキか!? 久しぶ

「おかげになつた番号は——

ふう、

緊張が解けていく。

「ほら留守電いれないの?」

「うーんと、『爽です、久しぶりだな。とにかく謝りたい事とか、話したいことがたくさんあるんだ。これを聞いたら連絡ください、待つてます。』こんなもんかな」「いいんじゃない?・きっとすぐ連絡来るわよ」

私もそう思う。

今は早くユキと話したい。

その後連絡が来るまで部屋の掃除でもしようという話になり、今は掃除中だ。

この部屋は応接用の机に窓際の花瓶、本棚とオーソドックスな部屋だがいかんせん私物が多い。

定期的にかたづけないと直ぐに物で溢れてしまう。

「北海道のお悩み解決隊（仮）」の活動は少しずつ行っているが、あくまで少しずつので。

相談を待つ間やたらと暇なのだ。

チカと二人ではできることも限られるし、面白そうな物を片つ端から持つてきた結果が今のが今の部屋だった。

「チカこれはどうする?」

「そつちの本棚入れといて」

「りよーかい。ん……これ」

私が見つけたのは有珠山高校の時に作つたアルバムだ。

ユキの取材の練習から一時期写真にはまつた私が卒業制作の名目で作つたものだ。内容は私達が搖杏の衣装を着たり、変顔をしたりして。要するに普段の私達が写つて いる。

「チカ、この写真覚えてるか? 減多にないチカの変顔」

「えつ? それは!」

これをアルバムに入れるのは最後まで反対してたつけ。

どんどん当時の情景ご思い出される。

「あんまり思い出させないで! 思い出しただけで恥ずかし!」

「いーじやん、みんなで一緒にやつてるんだし」

「ちょっと私にも見せてよ」

二人でアルバムをめくる。

改めてユキにみんなに会いたい思いが強くなる。

「こうして改めて見ると、ユキの写真が多いわね。それに心なしか他の写真よりも気合

いが入つてゐる気がするし」

「……」

「何か言いなさいよ?」

「いやな、図星だつたから何と言ひ訳したものかと」

「やつぱりか!!」

後に残る写真だから、良いものにしたいし。

おかげで満足の行く出来にはなつた。よそに出しても恥ずかしくない出来だと自負している。

「なら爽のお気に入りはどれなの? 肇原してたんだからさぞ良いものなんでしょう?」「そうだな……」

チカの冷たい目を気にせず写真を選ぶ。

これはアイドル顔負けの笑顔だ、こっちの大人な表情もいいな、素の表情も捨てがたい。

「うーん……」

「マジ悩みね。ゆつくり選んでいいわよ、電話もまだみたいだし」「電話……そうだ!」

スマフォを手に取り一枚の写真を呼び出す。

雪の降るなか撮った「奇跡の一枚」だ。これならチカも納得だろう。

「これが私のお気に入りだ！」

「これが……私はこっちのアイドル風の写真が良いと思うけど」

微妙な反応だ。

「この表情がいいじゃん！ 見る人に訴えかけるような」

「分からなくもないけど、やっぱりユキには笑顔が似合うと思うわ」

しぶしぶ納得する。確かにユキには笑顔が似合う。だけどこの写真は別だ、それを考慮しても特別な写真だ。

改めて写真に見とれないと

「ほら、さつさと掃除終わらせちゃいましょ。爽も速く」

「お、おう。ん？ この花瓶……チカが持つてきたのか？」

「爽が来ないうちにね。なかなか良いでしょ」

「この花もチカが？」

「えつ？ 花？」

不思議そうに返事をしながらチカが振り替える。

花瓶には一輪の黒百合が活けられていた。

黒百合は「この部屋にあるのが当たり前」だと言うように凜と咲いている。

「爽じやないの？」

「違うぞ」

「私でも無いわよ」

「……じゃあ誰なんだ？それになんで黒百合？」

「さあ……何か心当たり無いの？」

「うーん……」

サークル、部屋、花瓶、花、黒百合。ん？黒百合つてどこかで？

プルルル

考え混んでいた私は現実に引き戻される。
部屋の中が緊張感で満たされる。

プルルル

「爽！速く！」

意を決して電話に出る。

『もしもし、ユキか!?』

『爽先輩、お久しぶりです』

『ユキ……。そのなんだ、ごめんな。急に連絡
『一つ言わなければならないことがありますて、先にいいですか?』

私の言葉を遮つてそう話すユキに不安が募る。
嫌な予感が頭を支配する。そして

『爽先輩、今までありがとうございました。……さよならです』

『えつ?……ユキ? ユキツ!?\』

ガチャ、プレープー

呆然とスマフォを握ったまま動けない。

そんな私を見て何かを察したのかチカも黙りこむ。

部屋の中に電話の音だけが響いていた。

そんな私達を見るように黒百合だけがただ揺れていた。

第七話

私の頭が働くことを拒否する。

理解してはいけない、今度こそ壊れてしまうからと心が悲鳴を上げる。私はそれに従うようにただ呆然と部屋を眺めていた。見慣れた部屋のはずなのに知らない部屋にいるように思えた。

それでもユキの言葉が徐々に浸透してくる。よく聞く簡単な言葉だつたから？待ち望んだユキの言葉だつたから？もう逃げられない。

「今までありがとうございました。さよならです」

明解な別れの言葉だつた。

私の中で何かが壊れる音がした。

「爽?! 爽!!」

チカの大きな声に我を取り戻したのはそれから随分と時間がたつたあとだつたよう
に思う。

「……」

「爽?」

「……ユキがさ。さよならだつて」

チカが息を飲む音が聞こえる。

私は構わず続ける。

「今までありがとうございましたって。たつたそれだけ。私達の関係ってその程度の物
だつたのかな?」

「そんなこと無い!」

「ごめんなチカ。せつかくかつこよく説得してくれたのに、全部無駄になるかもしけな
い」

「何かする気なの?」

もう諦める準備はできた。今も酷い未来像が頭を過る。
でも

「諦める前に一言言いたくなつた!」

チカがくれたチャンスに何もしないわけにはいかない。
それにこのまま別れたんじや後悔しか残らない。
そんな終わりは私が許せない。

「さあ播杏に電話だ!!」

「ちょっと待つたー!」

出鼻を挫かれた、何よりも勢いが大事な時なのに。
「話が見えないわ。分かるように説明して」

「だから播杏に電話をする」

「……あなたがトイレに行つてから目を真っ赤にして帰つて来るまでに何を考えたか教えて」

「なつ!?」

「そんなはつきり宣言しなくても良くないかな？」

「いくら事実でも。」

「何をしてたのかは分かるから何を考えたか教えて」

「分かつたから追撃止めて」

「今度は見られなかつたけど、しつかりバレてるな。」

「まあ一通り泣いてスッキリしたし気にしないでおこう。」

「大した事じやないよ、私達の中でユキの行動を一番把握してるのは揺杏だろ？だつたら直接聞けばいい」

「その通りだけど、揺杏がユキの味方をしたらどうするの？無いとは言い切れないわよ」
勿論その可能性も考えてある。

「むしろその可能性が高いだろうな。あの黒百合、タイミング的にユキたちだろ？」

「多分そうよね、意味はわからないけど」

「簡単に言うと、黒百合には人を不幸にする逸話があるんだ」

「ある地方の殿様が時の権力者の奥方に地元の珍しい黒百合を送つた。それが最後に

は回り回つて殿様を切腹させてしまう。黒百合にはかつて殿様に殺された小百合という女の怨念がついていた。

確かにこんな話だつたはずだ。

「嫌な話ね……あれ？でもそれだと送つたユキの方が不幸になるんじや？」

「別に送られて來たわけじや無いしな」

「でもユキがそんなことするかしら？」

「しないだろうな。たとえ思い付いても、しないしできない」

「それで搖杏ね」

何の根拠も無い推理だけど、ユキは伝説とか逸話とか好きだつたし可能性は高いと思う。

それに黒百合はその辺に咲いてるとは言え、不自然すぎる。

搖杏か成香が忍び込んだんじゃないかな。

「嫌がらせ……ではないか、多分私達に現状に気づけつてことかな」

私とユキの関係はそれだけヤバい状況だと言いたいんだろう。私の危機感を煽つてるのかも知れない。

「取り敢えず黒百合は置いといて、今はユキの現状を搖杏から聞き出す！」

「素直に教えてくれるかしら？」

「ダメならカムイの力も借りる」

「本気なの!? でもどうやつて……まさか」 //

チカが急に赤くなつて怒りだした。

一人で何を考えているのか。

「そ、そんな力の使い方しちゃダメよ！ 私は許さないからね。だいたいああいうのは

……」

「何を想像してるか知らないけど、パウチカムイは使わないぞ」

「恋愛をちゃんと……へ？」

最初に思い付くカムイの使い方がそれつて。

私も思い付きはしたけど。

「そうよね。あ、当たり前よね」

「チカつてやつぱりムツツ

「ムツツリじやない!!」

食いぎみに否定された。その必死さが余計に怪しく見えるけど。

「あんまり溜め込むのも良くないぞ。ちゃんと成香にも相談して」

「成香を巻き込むな！」

「まあ引かれるのも恐いよな」

「その変態扱いを止めなさい!!」

チカも落ち着いたし早速電話をかけよう。

「誰のせいよ」

無視して番号をおす。

『久しぶりじやんか。急に連絡取れなくなるから心配したぞ』
『それについては後で謝るから、先にユキのこと教えてくれないか?』
それで聞きたい事を察したのか少し声色が低くなる。
やつぱりユキの味方なのか。

ガチャ

『もしもし、爽だけど。 摆杏か?』

『……ユキはアイドルになるんだって』

『へ?』

我ながら間抜けな声が出たと思う。

『正式にスカウトされて東京に行くんだよ。この前ののど自慢大会でついに白羽の矢が立つたんだ』

喜べばいいのか悲しめばいいのか分からなかつた。

ユキの夢が叶つた喜びとユキがいなくなつてしまふ悲しみ。

私の中でぐちやぐちやに混ざる。

『明日……』

『明日?』

『明日の飛行機で東京に行く。私達も見送りに行く予定だから、爽も来たらいいじやん?』

『……私が行つてもいいのか』

『なんで?』

『東京行きを台無しにするかも知れないぞ』

余計な枷はもう壊れている。

自分でもユキを前にして冷静でいられる自信はない。

『好きにしろよ。本当にヤバいと思つたら止めてやるからさ』

『播杏……ありがとう』

『たまにはな。明日待ってるからな』

明日……最後のチャンスだ。

チカ、播杏、あと成香も。みんながいてくれたからできたチャンスだ。

電話を終え、おもむろに立ち上がる。

目の前にある黒百合を手に取り、あらためて決心する。

「たとえ呪いの花でも私には関係ない。伝えたいことを伝えるよ。私自身のために、そして何よりユキのこれからのためにも」

* * * *

第八話

チカと一緒に空港行きのバスに乗り込む。

座席に座ると、スマフォの写真を眺めながらユキと出会つてからの期間を思い出す。
(本当に色々あつた。やつぱり終わらせたくないな……)

私の本音、自然な気持ち。

心が揺れ動く。

ふうと息を吐き心を落ち着かせようとスマフォをしまおうとする。
しかしふと手が止まる。

私が奇跡の一枚と自称するユキの写真だ。

(あれ? いつもと違うような……)

ユキに別れを告げられ、吹っ切れたからだろうか?
写真が今までとは違うように見える。

よく見る、そしてわかつた。

私がこの写真を気に入つた理由が。

写真に写るユキは、何かを欲しがるような、何かをねだるようなそんな表情をしていた。

(私は『ユキに私を欲してほしい』と思つていた訳だ。)

今思えば一目惚れだったのかも知れない。

私は初めて会つた時から、ユキが本当にアイドルになれると信じて疑わなかつた。

こんなに可愛い綺麗な子は他にいないし。

こんなに人を夢中にできるんだから。

私のやり方も感情も色々回り道をして躊躇ついて来たけど、自分の気持ちだけは初志貫徹していたのかな。

やつとそんな風に思えた。

* * * * *

空港に着くと播杏が仁王立ちで待ち構えていた。

「待つてたぞ、爽！さあこっちだ、後戻りは無しだぞ」

何となく嫌な予感がしたが、大人しく播杏に着いていく。

何かあつたとしても私のすることは変わらない。

暫く歩くと開けた場所にでた。人も少なくガラツとしている。
そこにユキはいた。

キャリーバッグを手に成香と何やら話をしている。

こちらからでは顔は伺えないが、見るからに東京行きの準備は万端のようだ。

「今さらビビらないでしゃんとしなさい」

どう声をかけたらと悩んでいるとチカに背中を押される。

「そんなのいつも通りでいいわよ」

それが難しいんだ、と思いつつ一步を踏み出した。

「おうユキ、久しぶり」

「おうユキ、久しぶり」

爽先輩はいつも通りにそう話しかけてきました。

それから少しの間お互いの近況など、当たり障りのないことを話しました。

爽先輩は私が東京へ行くことを知っています。

す。

それが何かは分かりません。

ですが聞かないと後悔するに違いありません。

会話が止まつたタイミングに思い切つて聞いてみます。

「今日は来てくれてありがとうございます。何か私に伝えたいこととかありますか？私は先輩に伝えたいことがあります」

「……あるよ。今日はそのために来たんだ」

最初は驚いたような表情をした爽先輩ですが、ハツキリと「ある」と言いました。
そして話し始めました。

「まず一つあの突然の電話。確か『今までありがとうございました、さよなら。』だつた
か？最初は悲しかつたしへこんだ。でも冷静になると……失礼なんじやないか？」

「……へ？」

予想外の言葉に反応できませんでした。

「麻雀もアイドルも一緒にやつて来た先輩にあれだけで別れの挨拶を済ませるのは
ちょっと礼儀が足りない」

「……」

予想外かつ妥当な指摘に相変わらず反応出来ません。

「私が教える。だからもう一度私とアイドルを……」

そこで先輩は口を閉じ、何か考えているようです。

私としては「もう一度私とアイドルを目指す」そう言つて貰えるだけで充分です。

ですが、先輩の言いたい事とは少し違うようで。

絶対に危機逃さないよう次の言葉を待ちます。

「ユキ、改めて言うよ。私はずっとユキが好きだつた。だから私と一緒にじやない。
……私だけのアイドルになつてくれ」

静かに力強く語る先輩の言葉。

やつぱり私には予想外でした。でも今度はしつかり体が心が反応します。
気づいた時には泣きながら爽先輩を抱き締めていました。

* * * * *

「私だけのアイドルになつてくれ」

そう言つた私をユキは泣きながら抱き締めてくれた。
宝物に触るようにそつと抱き返した。

「落ち着いたか？」

「……はい」

真つ赤になつた目でユキは答える。

私の目も少し赤らんでいる。

「答えを聞いてもいいか？」

やはりユキの言葉としてしっかりと聞いておきたい。

「私は……ずっと爽先輩のためにアイドルを目指してきました。ですから先輩だけのアイドルになれるならこれ以上のことはありません。……私もずっと好きでした」

そしてもう一度抱きしめ合う。

一緒にいた時からこうなることは、実は簡単な事だつたんだと思う。
それを私が遠回りをし、ややこしくし、難しくしてしまつた。

でもその分、今腕のなかにいるユキが本当に愛おしく大切に思う。
もう離さない。

「いやーお疲れ。良いもの見せてもらつたよ」

「私もドキドキしちゃいました」

外野から眺めていた桜杏たちが話しかけてくる。

私も一人には聞きたい事があつた。

「今回の件どこまでが本当でどこまでが仕込みだつたんだ?」

「揺杏たちが何かしていいるとは思っていたが、実は良く分かつてなかつた。

「東京の事務所からスカウトされたのは本当だぞ」

「はい。ただスカウトは受けていません。今回東京に行くのも事務所とかアイドルの仕事を見学させてくれるというので」

「それを聞いて使えると思つた私がチカセンに協力を扇いだ」

「ごめんね、爽。私は全部知つてたの」

「……」

空いた口が塞がらなかつた。一番の味方が敵だつた訳だ。敵というのは可笑しいかも知れないけど。

「チカは演技頑張りすぎじゃないか？人間不振になりそうだ」

「そんなに!? まあ言つた事は私の本音だからあんまり演技なんてしてないわよ」

それを聞けて良かつた。

チカも揺杏も心配させていたことに改めて頭が下がる。

そして

「成香は何もやつてくれなかつたんだな」

「わ、私だつて一緒に作戦を考えてました。あとは黒百合の花を気づかれないとおいたのも私です」

「ありがとうな」

成香も本当に考えてくれたのだろう。

あとユキと一緒にいてくれたんだと思う。

「でもあの黒百合はやり過ぎじゃないか？ 怪しそうな意図もイマイチ分からない」

「あれは私がお願ひしました」

やはりユキの提案だったのか。

「ユキから聞いて無きやあの伝説も知らなかつたぞ。殿様を呪うやつ。というか怖いことするな」

「確かにあの話は怖いですね」

それを私に贈るか。嫌われているからかとも考えたんだ。

「黒百合には他にも逸話があるですよ。北海道、アイヌに伝わるもののが」

それは初耳だ。

だが黒百合の逸話だ。あまり良いものとは思えない。

「好きな人への想いを込めた黒百合をその人の近くにそつと置き、相手がその黒百合を手にすれば、いつの日か二人は結ばれるという言い伝えがあるそうです」

とてもロマンチックな話だ。

私は黒百合を手に取った事を思いだしほのかに赤くなる。

「ただ呪いや媚薬の類いだと解釈されることが多いみたいですね。でも呪いというには綺麗だと思いませんか？」

「そうだな。こんな呪いなら私は歓迎だ」

私はユキへの告白を決意して黒百合を手に取った。

呪いなんかに負けないと意気込んで。

あの時から呪いにかかるつていたのかも知れなけれど、今はその事にさえ感謝を覚えた。

『私だけのアイドルになつてくれ』 つてちょっとダサくないか？』

「そうですか？私は素敵だと思いますよ』

『成香、私だけのアイドルになつてくれない？』

「へ？……それは素敵です』

外野が勝手に何かやつているがそろそろ飛行機の時間だ。

ユキと繋いだ手に自ずと力がこもる。

「爽先輩。今回はただの見学ですからあまり心配しないでください。必ず帰つて来ます

から」

「そうだよな。待つてるから連絡もするからな」

そう言いながらも手を放す気にはなれなかつた。

最近の出来事で私はとても弱くなつてしまつたようだ。

「それじゃあ先輩、一つ約束しましよう」

「なんだ？ 今なら何でも聞いちゃうぞ」

「ありがとうございます。……私が帰つて来たらキスしましょう。二人だけで

「……約束だぞ」

のど自慢で私がしようとしたキス。

私の一番の間違いだ。

それを約束してくれた、本当に嬉しかつた。

「それじゃあ爽先輩。そろそろ時間ですので」

「待つてるから、頼れる先輩になるから。……帰つてこいよ」

「はい。行つてきます」

ユキはそう言うと振り返らずに言つてしまつた。

私は強くなろう。

ユキを支えられるように。

頼れる先輩としてパートナーとして。
私はユキの背中にそう誓う。

「ユキーーー!! またなーーー!!」

ユキはアイドルになる。

なら私も大きくなろう。

アイドルを腕のなかに抱えられるくらい、よそ者の言葉なんて届かないくらい。
ユキの背中に何度も誓つた。